

同上 通名荆芥 一名靜風尾錄輯 鄭芥本草 京芥本草 一捻金附方 再生丹 舉卿古
拜散同上

京師ニ自生ナシ、城州山城ノ郷長池、和州紀州ニ栽蒔シ、藥舖ニ出ス、其苗一年ニシテ枯ル、藥舖ニ
售ルトコロノ新種ヲ下シテ生ジヤスシ、苗高サ二尺許、方莖ニシテ葉兩對ス、艾葉ニ似テ小サク、

一寸餘ニシテ五枝アリ、莖葉トモニ黄綠色、香氣多シ、莖頭ニ穗ヲ成シ、細小花ヲ開ク、莖葉穗トモ
ニ藥用ニ入ル、南部ニハ自生アリ、藥舖ニ舶來ナシ、此草魚品ニ反ス、

〔廣益地錦抄〕六荆芥けいがい 葉ほそ長ク切りまハシ、見事にあひらしく、草形ながめ有り、花ハ見るかい
なし、秋實をむすぶ、取置て二月蒔べし、二年草にて根ハ冬枯る、

〔農業全書〕十種之類、荆芥
けいがいも多く用ゆる藥なり、菜をうゆるごとく、畦作りし、たねをちらしまきをき、苗にしてう
ゆる事薄荷と同じ、少間遠にうゆべし、六月土用に葉を取干べし、七月葉さかへたる時又取べし、

其後七月花咲て刈取あみて干し、其ま、藥屋にうるべし、少みのらんとする時刈取ものなり、

〔本草和名〕十八薄荷はくか音可唐、
〔倭名類聚抄〕十六薄荷はくか 養生秘要云、薄荷和名波加、今案、
音釋、而但音可、可證薄字之誤也、又按薄荷當是唐本草之舊、千金翼方、證類本草作薄荷、恐宋人所

改蓋以說文玉篇廣韻無荷字也、然千金方作芡荷、醫方類聚引食醫心鏡作波荷、亦皆作荷、集韻云、

荷菜名、或從呵作荷、荷字見韻書是爲始、又證類本草薄荷條引陳士良、有吳拔蘭胡拔蘭、玉篇云、蓼

草藥蓼蘭、李時珍曰、甘泉賦作芡荷、字林作芡苦、千金方作蕃荷、蓋此草原胡種、無其字、假借薄荷、
可薄荷字、或作拔聞、婆聞、後從艸諧詞、可何聞聲、則作荷、非煩荷之荷、作荷、非夫渠之荷也、
中本草

薄荷